

## 寺院存立と使命について

——郷土福岡を中心とした仏教につながる人脈の一貫——

矢野俊雄

(福岡教区小倉組円応寺)

度毎に「無常迅速」ということを沁々と感じます。「仏

教福祉」第六号に「仏教と児童福祉・国際児童年にあたり児童への問いかけ」と題し小論を掲載されたのが昭和五十四年でありました。当時の発行人として登録されていた恒川武敏先生も今やなし。又先生の因縁深い菩提寺円成寺住職林寛碩上人も亡し。考えてみれば僅かの間に事態は刻々に変化をとげていることを見ます。近時小生の同窓の有意の上人も五十有余の歳を以て西化せられる。

学生時代より一つの信念を持ち寺院経営の理念を貫ぬいていただけに真に惜しい気持である。着々として自坊の景観が時代に即応しつつあっただけに何としても残念であります。取りまく環境の中にはまだまだこれに似た事象は多

々生じてきています。近時の病態は複雑である。

或る時不意に突然病魔はおそいきたり身体はどんどん変革して行きます。それをくぐり抜けた者が残って行く。即ち食い破りと言われているものである。僅かに六年の間に周囲を見ても事の变りは異常である。この事を見ても年令を重ねる度毎に私は「仏法」の持つ有難さが少しずつ理解されてくるようである。説教を志す者としてその度毎に恵まれてある・なしに関わらず「信心の歎び」特に「仏法」「法然上人の選択された念仏」の自信を機会ある毎に一人でも多くの方に広めていきたい願いで一杯であります。此の度は「仏教と地域福祉」というテーマの下に「寺院存立と使命について」の項目に就いての言及であります。勿論

学究的に研究している者ではありませんので平素いろいろと考えていることを出来るだけ素直に誌してみようと思います。先ず「寺院存立」と云うことの件。

浄土宗門の寺院としては普通八ヶ寺と言われているが実数の活動している寺院数は七千二百ヶ寺と聞いています。其の差八百ヶ寺は在るけれども活動は余りしていません。其の差八百ヶ寺は在るけれども活動は余りしていません。兼務寺の一種であるという。活動していない寺ということとはただ在るということの意で檀信徒との間の交流が余り無いという意味か、つまり念仏の声の交わりが無いということとでしょうか。私も多聞に洩れず一ヶ寺の兼務寺を持っています。浄土宗福岡教区小倉組第十五番引接庵（通称は閻魔堂まじやうと言っている）の兼務である。檀家は一軒もありません。……私自身としては檀家が一軒も無いということはおかしい表現でありますが事実一軒も出来ない状態の中に在る。現代になって少しずつ変りつつありますが今迄は往時小倉長浜ながはまと言つて漁夫全部の村落の中に在り殆んど全戸が西本願寺派の真宗寺の門徒もんとに属する者乍らである。

閻魔堂の総代・世話人は凡て門徒の方ばかりで構成され今日まで維持されてきている。閻法得益の伝統が血の中に

流れてきている如くお寺のお世話は一脈よく通じております。宗門としては「信徒寺」であり、「檀家寺」「檀那寺」とは又違った意味での風情を備えております。往時は「閻魔堂」も存立の意味も大きくなっていたようでもあります。所謂「隠居所」「隠居寺」として円応寺住職が隠居した際この閻魔堂に入るように常識になっていたようです。

即ち漁業を本業とする長浜地区の住民にとっては、檀那寺が西本願寺派に所属する真宗関係の寺である為に漁業を本業とする仕事の反面、魚類の供養への志向が果されない為「閻魔堂」の所在を求められたものと思います。真宗の宗義には「回向」ということがない為それに代わる回向及び供養の儀式が必然的に求められたものと思います。

法然上人晩年の讃岐御流罪のみぎり高砂在の漁民を代表して八田治朗右衛門への説法「念仏申し乍ら魚をとるのが宜しかろうぞ」の話を思い出す如く漁民の魚への供養の心は今日の時代に至っても素晴らしい心への世界への開眼でありましょう。魚類収獲に対しての業障消滅の願いを考える時どうしても回向の寺院が必要であったのではなからうか。漁業に従事する漁民の皆様はまことに善良であります。

す。善男善女の集まりであります。毎年一月と八月の十六日閻魔様の日に地区全体の願いによって法要を修めております。法要は施餓鬼法要の形式で毎年かかさず修められて

おります。又八月二十四日地藏尊の祭日には長浜漁業組合の主催で漁類供養の集まりもおさめられています。日頃烈しい労働に従事している漁業組合員一同も此の日だけは真妙な一善子となつてとりまく諸々の業障消滅を願つて合掌念仏焼香を献げるのである。法要の後一同相い寄りまして放生会の形式をとり揃つて海に魚を放ち供養を願ひ漁業の発展を祈念いたし友情交換の場となるのである。一つの寺院を中心としてくり広げられる心の集合の場としての在り方ではなからうか。魚をとり利益をあげる乍ら仕事ではないということが夫々の全員の中には様々な形で志向されているのではなからうかと思ひます。――幾百年と続いている閻魔堂でありますが敷地が狭い庵寺である為に（お堂は十二坪、周りを入れて二十坪位になりますか）位牌納骨堂をと計画すれども狭い為に果されずに今日まで来ている状況です。位牌納骨堂が設置されれば加入によって信徒より檀家になつていただき護持の責任が生じて来るだけに残

念です。一軒も檀家が出来ないということはない訳だけに一層心残りです。

本年は一月より閻魔堂の修復事業を信徒の方より思ひ立て、早速総代・世話人等が丸となつて計画立案され地域（長浜地区全般）にわたり修復事業の募金活動を展開され（約五百万円の予算）半年の経過を経てこの七月二十一日（日曜日）に修復落成の法要を修め皆様に大へん喜んでいただきました。ささやかな形ではありますが紅白餅を振舞ひ閻魔堂の修復を我がことのように皆様喜んでいただきました。誰が言うともなしに此の御縁を大切にしていまして毎月とに角集まるようにしよう・顔を合わせるようにしようと言ひ毎月十六日が閻魔様の縁日と言ふことで十六日夜に集まることにして今日まで続けられている。内容は浄土宗のお勤めの形式で特に「一枚起請文」を中心として進言いたし、簡単な法話を入れて近況を話し合うことにしている。誰がどうしたということでなしに夫々が自由に相寄り集まつて出来たことで「存立及び使命」の一端の姿になるということではなからうか。もう少し敷地に恵まれれば「納骨位牌堂」を思い立てば何軒かの檀家及檀徒は少しづつ出来

てくるのである。教化は必ず開かれるのである。前向きに進めれば教化の道は必ず開かれるものと思います。時々耳にします言葉、「私の寺は随分永い歴史を持ち続けておりますが、昔から無檀寺院で檀家は一軒も有りません」と誇らしげに言われる場面がありますが私はその点非常に疑問を持っています。「なぜに今に至るまで怠けていたのか？」と自問自答せざるを得ません。常に布教宣揚の場にいるの感じを持ち続けることが急務ではないかと思っています。

私達が生活が続ける福岡県・北九州市、いろいろな面で特色づけられる点も多くあります。玄海灘及び内海（周防灘）・有明海に囲まれた地形から受容する影響の中にある。北九州市の往時の豊前地区（門司・小倉）には山口（長州藩としての）とのかかわり合い。南の筑後八女地区は佐賀（鍋島藩としての）及び肥後（熊本県）とのかかり合い深く、いろいろな縁の形で特異な人格形成がなされ今日まで及ばされていると思います。同じ福岡県内に於ても「都市の印象」として福岡市と北九州市としては僅か六十軒位の距離しかないのにその性格の違いは大きいものであ

る。第一に言葉づかいがまるで違います。「博多弁」独特の雰囲気は又格別であります。毎朝NHKテレビ連続放送劇「いちばん太鼓」に出てくる所謂九州弁「博多弁」も毎日つづいて聞いていると私達は全くうんざりするような気持ちです。北九州市在住の私は少なくともそう思うのですが福岡市在住の者は案外そうではないかと、これは察しています。例えば北九州の住民が福岡市に転動になると喜んで住居を福岡市に移す。だが福岡市の住民が北九州市に転動になると単身赴任、福岡市を離れようとしな

い。「北九州市と聞いただけで家族は顔をしかめた。病院長バラバラ殺人事件、替え玉保険金殺人事件でしょう。陰惨なイメージがあまりにも強いですからね」と最近福岡市から北九州市に単身赴任してきた或る銀行員の話です。ところが警察の統計よりみると福岡市の方が暗いのである。

例えば県内で捕まった覚せい剤使用者の三分の一は福岡市民。女性、少年犯罪、サラ金というような世相犯罪も福岡市が多いのである。昨年発生した殺人事件は北九州より六件多くて三十二件、盗みも千三百余件多い一万八千七百一件、売春は倍以上の二百三件。個室付き浴場の数は人口比

では十一大都市の中で三番目、北九州市の三倍もあるということ。明らかに社会の暗部は深いのだが福岡市のイメージは「明るく祭り好きな博多っ子の町」で定着している。ここで私達が考えねばならないのは凡そ真相とはまるごと全く反対の印象である。一度出来あがったイメージは仲々崩せないということである。「北九州ってこわい所なんだそうですね」と聞かれるたびに市民の一人として弁解にこれつとめるのだが、たいがいにはいやになるという気持ちである。火野葦平の一連の文学作品に見られる兵隊もののシリーズ作品及び「糞尿たん物語」作中の人物は素直な善良民であるが場所の印象が荒々しいのに結びつくのは私一人の印象であろうか。「北九州という所は大へんこわい所である」という都市の印象は仲々くずれることではないのである。

同じ北九州と言いましても門司、小倉を中心とした豊前地区と若松、戸畑、八幡を中心とした東筑地区とは永い伝統と風土によって形成された習慣行動でも違うように感じられる。豊前地区は行動に慎重的であり東筑地区は積極的である。豊前地区の慎重的な行動の面では一つの具体的な

例えとして言えるのは郷土作家として既に故人となられましたが岩下俊作氏の「富島松五郎伝」所謂世間ではよくご存じの「無法松の一生」に表現されている姿でありましょう。同じ北九州市出身の作家としてみても東筑の火野葦平と豊前の岩下俊作とはおのずからその違いを如実に示していると思います。「無法松」の話は考えてみると、より浄土教であるのではないでしょうか。つましい自分の身体と心の中に秘めた忍耐にも似た厳しい愛情を持ちつつ、自分の一生を貫ぬいた名も無い一人の車夫の物語は余程「豊前的」であります。そのことは元祖様の弟子で浄土宗の二連珠数を考案されたと伝えられている「阿波介」の最後を彷彿させる中尊寺金色堂の前で念々唱名の裡に雪の中で生息絶えたという伝説であります。私はこの話をよく「説教」の中に、①名前を唱える、②声に出す、③誰でも何処でも通ずる姿、としてよく利用させていただったのである。「阿波介」は如来様の名前を唱えながら金色堂の雪の中に埋もれたり。「無法松」は自分一人で秘めた恋慕の情をついに身体<sup>た</sup>の行動に托すことなく「奥さんやーい、奥さんやーい」と題材主人公の「吉岡大尉の奥様」の名前を

唱え乍ら雪の中に埋もれて絶えていくのである。

静かなる感情の極限は思わず声になり名前を唱えるということ——これこそ浄土教的な極致ではないでしょうか。激しい感情を外に出さずに内に秘めて辛抱に耐えて行くのは余りに「豊前的」と思わざるを得ません。この「豊前的」なるものと「東筑的」なものが交互にまじり合って「北九州市」は成り立っているという姿であります。あまりにショッキングな事件が二、三つづいた為に「北九州市」都市の印象は仲々ぬぐえない状況にある。むしろ実情は「清純」な「誠実」そのものの情操豊かな風情の環境の中に在るとは自負いたしておりますが、一度報道された「北九州市」都市の印象は仲々直るものではありません。

北九州市そのものは旧五市合併して二十数年にもなりましようか。五市合併して「北九州市」となりて人口が百万人を越えることとなりました。其の中、小倉は小倉北区と南区となり合わせて三十万人と聞いています。一番多いのが八幡東区と西区とで四十数万人と記されています。近時八幡製鉄を中心とした主産業が振わず不景気の波が直接に押し寄せ、昔の景気は一つの夢となりつつあるように思わ

れます。即ち「時代は刻々に変革を遂げ、そこに住む住民の意識は限りなく生々流転であると言う」往時の鉄を中心とした生活より今日では余程違った方面に変化しているということである。登録によれば北九州市の中の小倉北・南区合わせて三十数万人の人口の中に寺院数は幾らあるかと見ていくと——「小倉仏教会」に登録している寺院数は百十八ヶ寺となっている。人口の割合に寺院数が多すぎるという状況に在る。——参考までに八幡東区・西区は人口四十万人余の中に寺院数は少ない為に寺院も大へん大きな内容の寺院ばかりであるということ。同じ北九州市と言ってもこのような差が認められるのである。門司にしても小倉にしても人口数の割合いに寺院の数が比較的に多い為に皆住職様方は細くこまごまとせかせかと動き廻る方々が多いように感じられるようである。豊前地区として小倉は御承知のように細川侯、黒田侯、小笠原侯の藩政のもとに明治のご維新へと連なる歴史のもとに系統づけられている。所謂「城下町」として城を中心として町は形成されてきたようである。

自坊を中心としての寺の歴史をみれば「円応寺」という

名前の歴史は割合に古いとされている。浄土宗寺院名鑑を見れば「円応寺」という名称の寺は中津（大分県）・小倉（自坊）、それに福岡の「円応寺」と九州の三円応寺として歴史に残っているようである。いずれも御開山は「天蓮社眞誉上人」とあります。余程「細川侯」と深い因縁に結ばれたる間柄であったと思います。「細川侯」移封の度毎に附随してついて行ったようである。少しく調べを進めていきますと昔の上人は勿論「信仰」の姿は基本でありましたが、その他に考えられるのは特異な才能を具備されておったのではないかと考えられることである。建築、絵画、造型、茶、華道など余技である才能より「信仰」の面へと結びつけられて行ったように思われます。「余技」の關係よりお互いの交流が始まり誰言うとなしに「御本尊仏像」をおまつりし礼拝供養するようになり次第に「寺院存立」の形態を備えて行ったようである。当円応寺の開山上人である「天蓮社眞誉上人」の伝記はあまり詳しくは存じませんが、当山の第四世に「済蓮社九誉上人」というお方にについて近年よくお話をいただく機会もあり、特異な因縁を持たれていたようである。細川侯とも深く関係もあったため

に伺われますが、特に長崎の大村市附近、諫早市附近にある浄土宗寺院の何ヶ寺かの御開山上人に名を連ねていることである。なんでも鎖国当時のキリシタン關係の面にも関連があるようにも聞いている。細川侯と共に大村藩にも及んでいるということです。一連を通じて言えることは殿様おほかえの「大工職人」でありいろいろと建築關係で随って行き来していたのではないだろうか。殿様の御休憩所の意味で建物をたて、そこへ誰言うとなしに仏像をまつり礼拝することにより次第に「寺院形式」へと進化して行き存立を果たして来たようである。長崎県諫早の慶嚴寺・大村市の長安寺等がその開山の歴史に「済蓮社九誉上人」の名前が連ねられている。僧侶そのもの以外に余程の才能が多くの人々を惹きつけておったのであらうと察します。「九誉上人」の場合は建築・大工であり、それを中心として小さな文化を形成いたし其の中に次第に「寺院存立」の形態を進めて行ったのであらう。

人間としての魅力が先ず進み、信仰の面へと及んで行ったのではなからうか。「粹な文化人」という人間的な魅力ということでしょうか。——このことは日本へ初めてキリ

スト教を伝えたと言われる「フランシスコ・ザビエル」の南蛮文化の渡来に見られる現象とよく似ているようである。南蛮文化の珍らしい品物にまつわりつつ、その文化の基底をなす宗教（キリスト教）へと及んでいったのである。「常に一宗信仰布教の場に在り」の姿が秀でた一芸へと発展いたし「寺院存立」の一面を画してきたものと思われる。

一般世間ではよく城下町には寺院の数が多い。よく「寺町通り」と言われる区域が夫々あるのを私達は知っている。——大阪城下の寺町通り、その他城下町にみられる「寺町通り」、近くでは山口県萩市にみられる寺町区域、福岡市の寺町、そして小倉城下の寺町通りなどはその典型的な例であろう。小倉の寺町通りは詳細に言えば「米町<sup>ふゆまち</sup>」と言っている。各宗旨の寺院が隣立していたものである。現在では時代の勢いによってきましたが寺々も都市計画などの発展の為郊外へ殆んど移転してきましたが、往時は小倉と言えば「お寺ばかりの寺町」として有名であった。その他に「医者<sup>いしや</sup>の町」、それに弁護士さんの町として又有名である。その昔は「軍人さん」（第十二師団の場所として）、戦

時中は軍需工場（小倉兵器廠）として活気を呈してきたものである。今日の各寺の檀信徒の基調をなすものはこれらの階層の方達が主軸になっておる程である。

この円応寺も昔は「円応寺筋<sup>すぢ</sup>」として何百年も言い馴らされてきましたが、最近では都市計画による新町名番号制により「円応寺筋」の名称も廃止されて新しく「魚町<sup>うおまち</sup>」と呼称されるようになった。よく聞かされているが「円応寺筋」の前は「長崎町<sup>ながさきまち</sup>」と言われ、その昔キリシタン弾圧による「踏絵<sup>ふみえ</sup>」の行われた場所であったと伝えられている。かのよく言われるキリシタン細川ガラシャ夫人も多少とも関係の伝えられることである。又有名な作家「森鷗外先生」の小倉での僅か三年足らずの滞在でも寺々を訪ねての伝記も多少残され今日までの文学的遺品として必ず登場してくるものである。有名な「即興詩人」の翻訳は小倉滞在中に為されたものとして今でも伝えられてある。「十二師団直属の医務部長」として医師の傍に文学を追い求めて勉強した姿は我々の一つの範となるものであろう。

このようにして豊前としての要路に在った小倉には中央と地方との交差点として昔より様々な種類の人種が行った



り来たりいたした訳で、自然に気の合った人達の休息の場所が形成されていったのである。藩を主体とした現在では県を同じくし主体とした人達の集まり、「同郷人」の集合場所もおのずから形成されて行ったのであろう。

人と人との往来、其の中に人生の縮図が展開される。その事は即ち生老病死の四苦であり愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五蘊盛苦を入れての八苦の姿である。全く世の中は自分の思うようにいかないことが繰てである。「思うように行かないことが喜ばれるのが仏法である」と徹すれば立派な仏法者であると言える程である。福岡県人として私は一つの「説教」の題材をいただいていることに一つの喜びを持ってゐる。これは一つの歴史的事実であるだけに事ある度に一つの自信に似た喜びをいただくことが出来る。所謂浄土真宗本願寺派所属の博多萬行寺まんぎょうじの「七里恒順和上」の布教の姿である。江戸時代の末期より——明治二十二年に亡くなられた一代の説教者であり、晩年は極度の中風にかかれ日々念仏歎喜の裡に尊とい一生を終えられたと伝え聞いている。「思うように行かないことを此の上ない喜び」として一生を全うされたといだいている。

「御本山に詣るならば京都は知恩院・本願寺へ——御説法を聴くならば博多萬行寺へ」「萬行寺へ」と一世を風靡ふうびした文句であった。現今のように交通の便はなく山を越え、野を越え、船に乗りついで博多へ、博多へと集まって来たと聞く。「お同行衆や、寝ても醒めても喜び申すべし、お念仏じゃ、なまんだぶ」と朝夕参詣者に切々と訴えるが如く説法に没頭されたと聞いている。「ああ有難いっちゃー」念仏を申し申し仕事に励み、箒を持ち、掃除をし、算盤そろばん片手にせつせと励んでいる姿をよく見たものであるという。和上の説法を慕って萬行寺の前は「門前市」をなす程であったという。

おのずから寝泊りする所が必要であり多くの宿屋が作られたと言われる。夫々の同郷のよしみを持って多くの屋号の旅館が作られていたのである。例えば「豊前屋」「越後屋」「備前屋」「肥前屋」「浪花屋」等々、土地の名を冠した旅館が萬行寺の周りに出来たもので、大へん賑わいを呈したと言われている。

現代では殆んど無くなりましたが、中にはまだ名残りをのこして今日まで続いている宿屋もある。「門前市」の一

つの型としてあるものであろう。毎日数多くの参詣者、信者の中で鋭い感覚を持った或る信者が（岐阜県の大垣の方だと言われている）「醒めて申す念仏は判るが眠っても念仏が申されるものであろうか」と説法をじっと聴き、真夜中に萬行寺の七里和上の部屋へ近付き実際にしらべに行った門徒があつたそうである。仲々熱心な参詣者があつたものである。次から次へと日中のひきも切らぬ参詣者の応待に疲れての和上もやはり人間であります。「ぐうーぐうーなまんだぶ、なまんだぶーぐうーぐうー」お疲れのいびきの声である。耳を澄ますと確かに聞える、いびきといびきの間にきこえる念仏の声、吃驚して思わず合掌したその参詣者。まことの説教こゝに在りー嘘でない説法こそ、ここに在りで、これこそ多くの大衆をひきつける真実の姿ここに在りで有難く念仏の道を進められたとのこと。「御本山に詣るなら博多の萬行寺へ」……「お詣りに行く時や一人じゃー歸りには二人連れ、如来様と二人連れ」という言葉を流行として当時の方々が一つの法悦を以て「聞法得益」の喜びを身に体して時代を展開して行ったものと思ふ。勿論現代では判じ難い程時代の差はありますが当時と

しては時代の先端を行つたものであろう。「行く時じゃ一人じゃー歸る時は二人連れ、博多人形と二人連れ」どこかで耳にした言葉のようである。博多商人のいきの強さを永い歳月の伝統の裡に感ずるようである。一つの「寺院存立と使命の一端に通じないと言へば虚言であらうか。」博多には古来より多くの宗教関係の支那大陸との往来が地域的な関係で記録されている。「伝教大師」「弘法大師」は勿論、「慈覚大師」「道元禪師」「栄西禪師」などすぐ思い出されてくる。その事実が三国伝来の「法の伝来」「伝法」の自信となつて「日本仏教への自覚」に大いに影響されてくるのである。若しも仮りに我が「法然上人」も直接支那に御留学ということになつていたらばどうであらうか。将に歴史の事実と発展は「紙一重」である。何がどのようになるか、思いもかけぬこともある如く様々な要因を内在して世の中は常に動いていくのである。「遣隋使」「遣唐使」の往時の情熱は理屈ではなしに生死をかけた教えに生きる行動を大きく讀みたいものである。そのような「情熱」がどこから出たるものか？。現代はどこ迄も便利過ぎて身勝手な行動の時代ではありますまいか？ 私

達は考えてみるとそれこそ「反省」の日々である。もう一つ、福岡県・博多で忘れてならないもの「寺院存立と使命」にも深い関り合いのあるものとして「仙崖和尚の遺偈」の話を次にあげてみたいと思う。

「仙崖和尚」は大へん大衆に親しまれた僧風の方で今日の博多商人の商業道德の基を形づくった方ではあるまいか。「仙崖和尚」の僧風により黒田侯菩提寺としての「博多聖福寺」の基礎は深く固まり、殿様の帰依を深め、民衆との深い愛着を得て寺風、僧風の大発展を期するのである。旧博多駅のすぐ近くに在る聖福寺―それこそ博多の一つの象徴でもある。その意味で博多という町と「聖福寺」との関係は無縁では決してない。「仙崖和尚」は西暦一七五〇―一八三七年で博多聖福寺に住し、独特の戯画、書を通じて臨濟禪を説き教化につとめた方で独特の風格である。同じ福岡県出身の財界人出光興産社長であった故出光佐三氏が深く愛着を持ち、その殆んどの作品を集め出光美術館を作り仙崖和尚作品を集めた程である。此の世の中で最もめたい言葉は何でしょう。「父死ぬ、子死ぬ、孫死ぬ」このことが一番めでたいことじゃ、世の中は仲々順序通り

に行かないことをひねくった言葉である。又忘れ難い文句に次の歌がある。「足ることを知ればこそあれ福の神、二つ鯛つる恵比須なければ」世の中そうそう二つよい事はないんだよ。臨濟禪特有な言々句々である。

人間欲のあくなき追求にひょっと冷水をかぶせられるような思いである。仙崖和尚には常にその僧風を慕って約三百人程のお弟子が随喜したという。仲々現代の名僧このようにあるかと思えば驚ろくべき徳風でもある。その仙崖和尚が八十有余の生涯を経て死に臨んだ時の有名な遺偈の話が今に残されてある。弟子の一人が「お師匠さん、愈々お別れようでございます。仙崖さん、仙崖さんと言われて有名なお坊さん、偉いお坊さんと言われています。此の度はどうしても間違いのないご往生のように思われますので、よその方が書かれるように我々弟子に一つ遺言の偈を書いて下さい」と言い寄ってきた。「そうかい、それなら書いて進ぜよう、紙と筆を持って来い」というので仙崖さんの所へ紙と筆を持っていきました。何を書かれるか―とじっと弟子達がのぞいていたら、「死にとうない、死にとうない」と書いたという。弟子達が驚ろきました。「お師

匠さん、あんまりや、一代の師匠とも言われるあんたが今死ぬ時に『死にとぅない』と格好悪いことです。もっと他に気の利いたこと書かれたらどうですか」と言ったら「まだ、いのかんのかい、そうかそうかそれならもうちょっと書こう」とその横に「ほんとうじゃ、ほんとうじゃ」と大きな字で書かれたという。そしたらすぐに息を引きとったという。禅僧の立派な往生の一つの姿、形である。往生して仏になり、再びこの娑婆世界に還って一切衆生を教化・済度する姿―これを還相回向ぎやうきやうと言いますが、その一つの典型を示されたものと思う。『衆生本来、無一物、無一物中無尽蔵宝』という禅家の言葉、その言葉や真に良し、無常、無我、寂靜の三法印の仏法を如実にさし示した心の在り方ではあるまいか。小林一茶の有名な句に「裸にて生まれてきたのに、何の不足」という俳句によってどれだけの人間が自暴自棄より救われたか、人間は考え方が変れば何でも出来ないものはないということの一つの例でもある。「無限の可能性の喜び」は仏法そのものであるということ、その言葉は真に良しです。

無量の喜び―無量寿―阿弥陀如来の言葉の連なりにも一

つの不思議な要素を感じます。「人間開眼すれば無尽なり」というそのことである。福岡・博多にはこのようにして「七里恒順和上」「仙崖和尚」の伝統にきずきあげられたる伝統が今日まで生きていると言ったら過言になるであろうか。商業・産業も都市の繁栄なども突きつめれば「人間性の回復」にあるとも言えるであろう。宗教の持っている生命への回帰であると思う。東京・大阪・京都とは又異なった意味で仏教の果すところの寺院の存立と使命の一端につながるであろうか。「地域福祉」と仏教ということはいきおい郷土を中心とした題材になり勝ちでありましたが九州福岡を貫ぬいているのは「ほどほどの哲学の教」ということになりましょうか。他には「肥後もつこすと薩摩隼人」と言った土地柄もありますが、こちらの方は直情径行の表現であり九州人の一面を表わしていることになる。『酒はのめのめのむならば日の本一のこの槍を、のみとるほどにのむならばこれぞまことの黒田武士』有名な黒田ぶしの一節である。近年に於ては此の歌の文句も仲々曲解されている面もあるようである。福岡県嘉穂町益富城主だった後藤又兵衛は主君黒田公とそりが合わずに城を去った。

慶長十一年（一六〇六年）、その後を継いだのが「黒田武士」で名高い母里太兵衛である。酒宴でよく歌われる「黒田節」の主人公である。天正十八年（一五九〇年）、小田原征伐の祝宴が京都・伏見で開かれ母里は黒田公の使者として秀吉の腹心、福島正則を訪ねた。その時の様子を想像するに「飲めや」「飲まぬ」のやりとりがあったあと、そのうち福島が「俺の酒が飲めんのか」と挑発にかかった。福島は自分の戦功を自慢し、黒田をさげすむ発言になった。忠義心の人一部強い母里は頭に血がより、日本一の槍（やり）を貰うことを条件に「しからば、……」とグイグイ大杯を飲み干したのである。慌てた福島は部下に槍を取り戻すよう命じたが、母里は「武士に二言はない」とにらみ返したのである。この槍は織田信長、豊臣秀吉から福島に渡った日本三名槍の一つだった。この母里太兵衛が福岡県嘉穂町下益の曹洞宗麟翁寺に眠っている。博多駅北口の入口に石像が立ち往來の人々に語りかけるような姿である。何気なく口ずさんだ黒田節から我々は「ほどほどの人生哲学」を学ぶようである。『酒はのめのめのむならば日の本一のこの槍を、のみとるほどにのむならばこれぞまこ

との黒田武士』この歌の文句を一字々々読んでみる。「……ならば」は仮定。つまりまだ酒は飲んでいない。「……ほど」は程度を表す。この歌の真意は「もし酒を飲むとしたらどんな心構えで飲むべきか。自分の力量に応じたほどどの酒を飲みなさい」——というのである。「今では酔っぱらって歌うものと思っとるが大間違いである。母里様は確かに三升近くの酒を胃袋に流し込んだが酒には飲まれなかったということ。彼にとって『ほどほどの酒』であったから槍を飲みとれたので黒田節はあくまでも酒量をわきまえた歌である。

「交通事故も、ほどほどのスピードを守ったら事故にはならない。健康も、ほどほどの煙草、酒、食事を守れば長生きできる」

母里太兵衛から学んだ独特の「黒田節」の「ほどほどの哲学」である。全国で有名な黒田藩の「黒田節」である福岡県につながる面を参考して参りましたが「寺院存立と使命」につながる人間の交流は様々な文化形態を以て物より人へ、人より物へ、物と人の集結する場所と時間との関連に於て大きな意味を持ってきていたようである。私が現在

住んでいる「小倉」の歴史でもさかのぼってみると慶長五年（一六〇〇年）、関ヶ原の戦いで功をたてた綱川忠興が豊前小倉に入国した時は中央を流れる「紫川」以東に町はなく漁村が点在するだけだったと言う。忠興は土塁に等しかった小倉城を造築、拡大すると共に、上方から商人を集めて「紫川」以東の荒れ地に城下町を造ることを計画、献金の多かった商人に「大阪屋」の商号を与えたと云う。小倉の城下町が発展するにつれ「大阪屋」を名乗る商家は分家、店を出たものを含め数十件によったと伝えられている。併し四〇〇年近い時の流れを経て「大阪屋」の名を現代に伝えるのは現在は一軒だけとなっている。

時の流れは無常刻々であり、時代と共に人の流れは分散し集中するものである。慶長五年（一六〇〇年）細川忠興小倉入国を境として大きく時代的な変化を目指してくるのである。細川公おかえの部分を受持つ御用商人等が従って、細川前任の地より渡り住むようになってくるのである。特別な才能を必要とする職種、例えば紺屋（染物師）、鋳物師、鍛冶師、船場師、造園師、その他文人、茶人、墨客等往来によって集合、休憩の場所を形成していったよう

である。趣味は趣味を呼び、類は類を重ねて同志は同志を選び一つの集合体を形づくり檀家としての原型を保つことになってきたのである。仏像をまつことになり「御本尊」として礼拝いたして寺院開創へと進行していったと思う。所謂最初の間は単なる集会所であり、それが宿泊所となり、同宿の縁が主となって、仏像安置礼拝となり寺院へと展開していったのである。現在住職寺の福岡教区小倉組第五番円応寺も開山は慶長の年間前後だと伝えられ、今日では丁度四〇二年目に当ると伝えられている。

勿論その間には栄枯盛衰のこと言を俟たない。教化停滞すれば寺院は衰えていくのは理の当然である。たえず寺院というものは何か行事を行ない多くの信徒が出入りしておれば衰えることなくどうかこうかになっていくものである。

「法輪転ずれば食輪転ず」という先輩より語り伝えられている伝統の言葉もある程です。決断を以てやれば必ず成就するということである。結局は仏法の最も有難い哲理に結ばれることであらうか。「生活の事を中心として俗事を第一として為すならば教化は一步も発展はしないということである」何よりも先ず「法輪を転ずるということ」が何

よりも優先というところであります。

最初にもふれておきましたように、豊前小倉、北九州市となり五区の一つとなり小倉北区、南区とに分れ、人口三十万ばかりの中に仏教関係の寺院数百十八ヶ寺とある。他に仏教以外の諸宗派を数えれば幾らになるであらうか。その数知らずと言えば誇張になるだろう。やはり寺院と医院と弁護士（？）の町として、それが城下町としての小倉の特質でもありましょう。よく言われるように小倉は寺院が多すぎると言うところである。皆夫々が「存在理由」に立っていることである。その大半が浄土真宗本願寺派の寺院であり、大谷派（東本願寺派）は僅か三ヶ寺である。その他の宗派は五ヶ寺より十ヶ寺以内で点々としている所である。「仏法実りの聞法得益の地」としてのことであるかと言えばそれ乍りではないようである。適切な表現ではないが「肥後もつこすに薩摩隼人」に表わされる如く「陣笠ごろごろ」と言った様相もあつたのではないかと思えます。

私の知っている点では本願寺派永照寺住職西吟という方を中心としての在り方（永照寺は私等子供の時より「御坊さん、御坊さん」と呼び慣れている懐かしい呼称である）。

此の「永照寺末寺を中心として戦後独立して寺院として呼称することにより」一度に寺院数が増してきた。西本願寺派は我が派の行事の際には一致協力の形はとるが、仏教会その他の行事の際には或る一部分の寺院しか協力できない不思議な面を持っている。更に明治以前の時に小笠原侯の信任を得た黄檗宗の中国僧「即非和尚」に隠棲地として与えた「福聚禪寺」（私等は子供の時より大寺、又は広寿山こうじゅさんと呼称したものである）を中心として黄檗宗の本山格を中心としての末寺、内坊寺院、更には小倉郊外、豊前（京都郡・築上郡を中心として）に多く点在する西山派浄土宗寺院、宗内では西部地区として一角を為しているようである。氏名は失っていますが江戸時代の初期に高名な布教家が出現いたし天台宗より改宗いたし西山派浄土宗になったと言うことを記憶いたしておることである。西本願寺派・禪宗黄檗宗・西山浄土宗派を中心としてその寺院存立の形を見ることが出来る。武士を中心とした曹洞、臨済宗の寺院・町人商家を中心とした浄土宗寺院などその数人口に比例して多いこと此の上ないことであるが皆夫々尊（？）とい使命のもとに経営を続けているのである。

ここで一つの整理として何等かの意味で参考になれば幸甚に存ずる訳ですが私達はどうかのこののと言っても生活を つづける地域の特性住民のもつ気風より離れることは出来ないことで平素見聞の中よりとり上げてみることにする。

「北九州人としての気質」としてとり立ててあげることはないが特色のこととしてあげると、先ず第一に「言葉が荒い」「気が荒い」と言うことである。言葉そのものをボツンと切るような点があるのではなからうか。これは一種の兵隊気質とダイナミックな工場気質とが重なって、ほかの町には見られない気質を作り出したものではないでしょうか。その割合に比して親切であるということも特色である。「北九州のイメージ」として住民気質は「親切さ」であり「荒っぽさ」であり「つき合いの良さ」「まとまりの良さ」等である。此れ等のこと更に広く聞いてみると五〇％（約半分位）が「荒っぽい」ということをみとめている。その点は「スピードによる人身事故の発生率は北九州市が一番多いと記されている。又刑法犯の発生率が全国第三位であるということ。このことはとりも直さず荒っぽさのデーターではあるまいか。又次に北九州市には「植民地

な要素があると言われている。人口の移動を此の二十年間の統計を見てみると百万人出て九十万人が北九州市に入ってきていると言う。定着ではなしに常に移動する型について「植民地的」と言われるのであろう。こういうことからして北九州市としては肉体的労働をしている者が多いとしてどうしても言葉が荒くなるのではないかと思う。それ等の中から宵越しの銭を持たない、一度この人はと信じるという信頼感が強い、それに言葉に飾りが無いということ、こう言ったような「北九州人特有な風格」が出てくるのではあるまいか。とに角日本の大都会、又農山村には見られない一つの特性を生み出している因がひそんでいるものと思う。

とに角そうこうしている裡にも刻一刻変化を刻みつつ動いている。「諸行無常」「諸法無我」「涅槃寂靜」は世界不変の真理である。「一寸先は何が起るか判らない。皆凡て紙一重である」「凡ては我が身にはつかない。本来無一物である」「一つ所に留まらず、どんどん変化し輪廻する」という仏教の哲理まことに良し。大きく自信を持って、此の地に法縁をいただいた喜びを持って進むべきも



のと思う。三十万人の人口の中の百十八ヶ寺。小倉仏教会の現状の中、仲々容易なことでないが皆前向きに協力し合ひ此の時代を見つめている。

二年毎に輪番としてつとめられる仏教会の規約。「浄土宗ブロック」「日蓮宗ブロック」「真宗ブロック」「禅宗ブロック」と四ブロックに分けて会の運営を行なっている。自坊にもどれば一宗布教の宣揚となりますがもう一宗だけでは力の不足の時代になりつつなっている。各宗派相寄って「仏教の原点」に集結する時代になっている。各宗派共夫々に皆脱皮すべき諸問題を抱えながら悩みつづけているのが現状であろう。それが宗派を乗り越えて大きな輪となつて前進する時が将に今である。